

高浜虚子著「回想、子規・漱石」ワイド版岩波文庫、岩波書店、2010年1月15日刊を読む

## 子規居士と余

1. 松山城の北に練兵場がある。ある夏の夕<sup>そこ</sup>其処へ行って当時中学生であった余らがバッティングを遣っていると、其処へぞろぞろと東京がえりの四、六人の書生が遣<sup>や</sup>って来た。余らも裾<sup>すそ</sup>を短くし腰<sup>てぬくい</sup>に手拭<sup>すね</sup>をはさんで一ぱし書生さんの積<sup>つも</sup>りでいたのであったが、その人々は本場仕込みのツンツルテンで脛<sup>すね</sup>の露出し具合もいなせなり腰にはさんだ手拭も赤い色のにじんだタオルなどであることがまず人目<sup>そばだ</sup>を敬<sup>そ</sup>たしめるのであった。
2. 「おいちょっとお借しの。」とそのうちで殊<sup>こと</sup>に脛<sup>ふくらはぎ</sup>の露出したのが我らにバットとボールの借用を申込んだ。我らは本場仕込みのバッティングを拝見することを無上の光栄として早速それを手渡しすると我らからそれを受取ったその脛<sup>ふくらはぎ</sup>の露出した人は、それを他の一人の人の前に持<sup>へ</sup>って行った。その人の風采<sup>ふうさい</sup>は他の諸君と違って着物などあまりツンツルテンでなく、兵児帯<sup>へこおび</sup>を緩く巻帯にし、この暑い夏であるのにかかわらずなお手首をボタンでとめるようになっているシャツを着、平べったい俎<sup>まないた</sup>板のような下駄<sup>は</sup>を穿き、他の東京仕込みの人々に比べあまり田舎者の尊敬に値せぬような風采であったが、しかも自ら此の一団の中心人物である如く、初めはそのままで軽くバッティングを始めた。先のツンツルテンを初め他の諸君は皆数十間あとじさりをして争ってそのボールを受取るのであった。そのバッティングはなかなかたしかでその人も終には単衣<sup>ひとえ</sup>の肌を脱いでシャツ一枚になり、鋭いボールを飛ばすようになった。そのうち一度ボールはその人の手許<sup>てもと</sup>を外れて丁度<sup>ちょうど</sup>余の立っている前に転げて来たことがあった。余はそのボールを拾ってその人に投げた。その人は「失敬。」と軽く言って余からその球を受取った。この「失敬」という一語は何となく人の心<sup>ひ</sup>を牽きつけるような声であった。やがてその人々は一同に笑い興じながら、練兵場を横切って道後の温泉の方へ行ってしまった。
3. このバッターが正岡子規その人であった事が後になって判った。

P7 ~ 8

## [コメント]

子規と虚子の出会いの場面がおだやかな、心温まる文章で綴られている本書の冒頭。文学者とスポーツを通して自然に出会った若者が切磋琢磨(せつさたくま)して日本を代表する文学者となっていく軌跡が実感される著作。子規と漱石ファンとしては興味が尽きない書。

- 2010年10月4日林 明夫記 -